

大人たちの人間的な成長

NHKの朝ドラでは現在、翻訳者の村岡花子とその家族、関係の大人たちの恋愛や不倫などの人間模様が描かれています。なかなか“本場プリンスエドワード島のアン“が出てきませんが、後世、花子に光があたったのもL・M・モンゴメリーの素晴らしい原作があったからこそです。まもなく”Anne of Green Gables”の物語も出てくると思いますが、ここではテレビに先んじてカナダの話を紹介しましょう。

随想の今回は『赤毛のアン』がともすれば少女向けの小説ととらえられがちの中で、男性にも大人にもシニアにも参考になるものがいっぱい入っていること、物語の中での「大人たちの人間的な成長」に焦点を絞ってみます。

アンのはつらつとした姿と対照的に、遠慮がちでとつとつとした話し下手のマシュー。でもその誠実さ、アンに対する愛情の深さは誰の胸にも伝わってきます。

原作からの引用（最新の松本侑子訳）です。



・・・マシューは口ごもった。「だが、そのう、あの子を引きとるのは、やっぱり難しいかのう」。マリラの言葉——「当たり前ですよ。あの子が私たちの何の役に立つんですか」「でもなあ、わしらが、あの子の役に立つかもしれないよ」（第3章 マリラ・カスバートの驚き）

ミュージカルのマシューとマリラ（記者会見で）「わしらが、あの子の役に立つかもしれない」——なんという温かなマシューの心でしょうか！やがて、マリラもアンを心底から愛するようになり、物語が進むにつれて彼女の情愛も一層深まっていきます。

昨年11月、東京国際フォーラムで私も出演したミュージカル（国連クラシックライブ協会主催）でもマシューが言っています。

「わしはな、たとえ12人の男の子よりも、アン、お前1人の方がずっと嬉しいよ」

そしてマリラも、「まあ、アン。料理の腕もしっかりあげておくれ。期待しているからね」と。二人の気持ちが揃ってきます。こうしたなか、アンのおおじしなキャラクターが爆発するのです。

「アンは感激の『ああ』を連発すると、マリラの腕の中にぱっと飛びこみ、血色の悪い頬に、熱烈なキスを浴びせかけた。マリラにとって、子どもの方から顔にキスされたのは、生まれて初めてだった。またもや、例のはつとするような甘い心地に揺さぶられた」

前回述べましたが、アンはダイアナの家のお茶会で、仲間とのひよんな駆け引きから、引くに引けず、屋根の棟（むね）を歩き、転げ落ちて足首を骨折します。アン具合を心底から気づかうマリラ。初めは家におくことを断っていた彼女も、この時点ですでにアンが自分たちにとってどんなに大切な存在になっているかに気づくのです。



グリーンゲイブルズの納屋

今まで子どもを扱ったことのないマリラが、戸惑いながらもアンのしつけをしていく。話し始めたら止まらないアンのおしゃべり。愛していながらも、不細工がゆえにやさしく振る舞えないマリラのアンに投げかける言葉も楽しいですね。

<アンの孤児という立場を日本的視点から考えれば、世話になっている二人には少なからぬ遠慮をしなければいけないだろうに、という見方もあるでしょう。その中でアンは対等にふるまっているように見えます。これはカナダの可哀そうな子供の面倒を見ていこうとするキリスト教的な土壌とともに、先に述べてきたようにアンの天性の明るさ、はつらつきからきているのでしょう。二人の兄妹も厳しく教育しようとしながらもそれを温かく受け入れている——そんな情景が本の読者の、またミュージカル観劇者の心に温かな共感をもたらしていると思うのです>

マシューは、口下手の60代の独身男、マリラも質実のみを重視する気質の50代の独身女性だった。それまで世間づきあいが苦手で、兄妹だけでさびしく生きてきた二人が、アンを育てていくなかで彼女に感化されて、人を愛する喜び、人から愛される幸せを知って劇的に変化、慈愛深く心豊かな大人へと変わっていった。その人間としての幅の広がりや心の深まりが、同じ年代にある人たちにも、いろんな示唆を与えてくれているような気もするのです。これは物語の中でも、きわめて重要なサブテーマになっています。



島で牧草を運ぶトラクター

一方、アンがマシュー、マリラの愛情の中で健やかに成長していく半面、育てる二人は年老いていく人生の無常……。マシューが亡くなり、マリラも目が悪くなっていく。アンは大学進学を断念、マリラを支えながら再び自分の道を切り開いていこうとする最終章（幕）はまた、アンの人間的な成長ぶりが読者の心に映り感動を呼ぶのです。